

書評

Patrick Greenough and Michael P. Lynch (Eds.),

Truth and Realism.

Clarendon Press, 2006.

青山晋也

はじめに

本書では「真理は客観的か相対的か」、「私たちの心から独立に存在するものは何か」という二つの問題が扱われる。本書は三部構成で、第一部の「真理と相対主義」では第一の問いが、第二部の「実在論と反実在論」では第二の問いが取り上げられ、第三部の「方法論と論争の本性」では、第一部と第二部で採用されていた方法論自体が問題とされる。本書評では第一部に互いに関連した二つの論文を取り上げる。一つ目の論文は Crispin Wright の「直観主義、実在論、相対主義、そしてルバープ」である。Wright はこの論文で、真理についての相対主義、すなわち真理相対主義 *true relativism* を提案し、好みの論争における一般見解と呼ばれる立場を擁護しようとする。二つ目の論文は J C Beall の「一般見解」のモデルを作ること」である。Beall は、その論文で一般見解を擁護するために、Wright が提案するような相対主義を提案する必要はなく、ある種の実在論（相対主義的性格を持つ実在論）を採用すればいいと主張する。

これら二つの論文を読むことにより、私たちは次のようなアイデアが知ることができる。Wright の論文からは、まず実在論的な真理概念ではなく、新しいある程度の相対性を許す真理概念を提案する際の見本（重主張可能性 *superassertibility*）を学ぶことができる。また、ある事柄（概念）に相対性を生じさせたいときの基本的な戦略（全体論と、全体論を構成する諸要素の集合として複数のものを考える）も知ることができる。そして Beall の論文からは、まず実在論＆真理の対応説的立場から、実在と文の対応を説明する一つのモデルを知ることができる。さらに、対応説の立場に立ちながら真理概念に相対性を持ち込む仕方（極性見解）も学ぶことができる。

1 Crispin Wright 「直観主義、実在論、相対主義、そしてルバープ」

この論文で Wright は、二人の人の好みにおける相違を、その相違を保ったまま（二人が矛盾した言明をしたまま）どちらも正しいと主張する「一般見解」と呼ばれる立場を擁護する。そのために Wright が提案するのが、真理相対主義と呼ばれる反実在論的な立場である。この立場は真理そのものが絶対的なものではなく相対的なものであると主張す

る。以下ではまず好みの論争とそれに対する一般見解を確認する。

1.1 好みの論争と一般見解

好みの論争 *dispute of inclination* とは次のようなものである。ある食べ物などについて、二人（以上の人）の意見が対立しているような状況を考える。例えば、ルバーブについて、Tはそれをおいしいと思い、Wはそれをおいしくないと思っているとしよう。二人は確かに味の好みについて不一致である。しかし、だからといって、どちらが間違っているということもないだろう。そして、TとWはそうした意見の不一致に賛成する。こうした形の不一致が好みの論争と呼ばれる。

こうした好みの論争を次のように特徴づける立場が一般見解 *the ordinary view* である。

1. 対論者たちは真正に両立不可能な態度を持っている（矛盾 *Contradiction*）
2. 誰かが間違っている、あるいは誤っているという必要はない（無謬性 *Faultlessness*）
3. 対論者たちは、完全に合理的に、たとえ不一致が明るみに出て、歩み寄れないかに思われた後でも、自分の見解を堅持しうる（持続可能性 *Sustainability*）

Wright によれば、一般見解に対しては四つの対案があるのだが、ここではこの後重要になる過激実在論 *rampant realism* についてだけ簡単に紹介しておこう。この立場では好みの論争は次のように解釈される。まずルバーブがおいしいかどうかを決めるような実在的事実があると考えるので、ルバーブはおいしいか、おいしくないかのいずれかということになる。したがって、TとWのどちらかが間違っていることになる（無謬性の否定）。またこの場合、各自は自分の見解を堅持しえなくなる（持続可能性の否定）。Wright は一般見解を擁護するので、この立場は排除しなければならない立場の一つということになる。

1.2 単純演繹

排中律 ($P \vee \neg P$) を前提とするような立場（例えば（過激）実在論）を取ると、次のような簡単な演繹によって、一般見解は突き崩されてしまう。「単純演繹」と呼ばれるこの演繹では、矛盾によって無謬性が排除されてしまうことになる。したがって、Wright としては、この演繹をなんとか斥けたい。

[単純演繹]

- 1 (1) TはPを受け入れている（仮定）
- 2 (2) Wは $\neg P$ を受け入れている（仮定）

3 (3) TとWの不一致は誤りを含んでいない (仮定)

4 (4) P (仮定)

2,4 (5) Wは誤りを犯している (2, 4 から)

2,3 (6) $\neg P$ (4, 5, 3, と背理法から)

1,2,3 (7) Tは誤りを犯している (1, 6 から)

1,2 (8) $\neg (3)$ (3, 5, 7, と背理法によって)

(一番左側の数字は、同列の命題がどの仮定に依存しているのかを示している)

このように、(8) において (3) が否定されることで、TとWのどちらかが誤っていることになる。またこのことから、どちらが間違っているのかわからないため、相手が間違っていて自分が正しいと考えることができず、持続可能性も維持できなくなる。こうした事態に対して Wright は直観主義を取れば、(8) のステップがブロックでき、それにより一般的見解を維持することができるという。以下ではどのようにして直観主義が (8) の推論をブロックするのかを見てみよう。

1.3 直観主義的応答

まず (3) は次のように解釈される。

(3') Tが誤っているということはない、かつWが誤っているということはない

つぎに、これを否定した (8) を次のように解釈する。

(8') Tが誤っているか、あるいはWが誤っている。

これを「Tが誤っている」を「A」、「Wが誤っている」を「B」で表すとすると、(3') からそれを否定して、(8') を得る推論は次のような推論になっている。

(3') は $\neg A \quad \neg B$ と表わせて、これを否定すると $\neg (\neg A \quad \neg B)$ 。したがって、 $\neg \neg (A \quad B) \implies A \quad B$

しかし、ここで直観主義を取った場合、 $\neg \neg (A \quad B) \implies A \quad B$ 、すなわち二重否定を除去するステップは許されていないので、この移行をブロックできる。こうしたブロックは実質的に排中律が成立するのを阻止することを意味しており、それはつまり、二値原理を拒否することを意味している。

1.4 直観主義的応答の問題

直観主義的に応答した場合の問題は次のものである。一般見解の一つの特徴は無謬性である。一般見解では、二人が真正に対立していても、そのどちらかが誤っているとは考えない。そして、これゆえに、対立する二人も理性的に自分の意見を堅持できるのである。したがって、無謬性は持続可能性の根拠になっているわけだが、直観主義的応答では、排中律を導出するステップはブロックでき、無謬性の否定を回避できるのだが、無謬性を示すことはできていない。このことは次のように表現できる。一般見解は過激实在論と対立するので、一般見解を守りたければ、過激实在論を退けなければならない。しかし、(1) 誰かが間違っているということに正当化がないということ ($A \rightarrow B$ が導けないこと) と、(2) 誰も間違っていないということ ($\neg(A \rightarrow B)$) は別の問題である。そして、無謬性を言いたければ、後者が言えなければならない。しかし結局のところ(1)が言えるだけ(つまり、二重否定除去をブロック)では、二人のうちのどちらかが間違っていることを示すような真理メーカーがないことを示せていない(つまり今のところ知られていない、ということにすぎないかもしれない)。したがって、好みの論争に決着をつけるような事実(真理メーカー)がない、ないしそのようなものがあると考えer理由がないことを示さなければならない。しかし、直観主義的応答では、このことは示されていない。

1.5 真理相対主義 True Relativism

ここまでの問題を整理しておくと、一般見解を擁護したい人の目標は次のものである。

[目標] 二人が真正に矛盾していながら(同じ一つの命題に対立する態度を取っておきながら)、しかし同時に二人は共に間違っていないということ(無謬性)を示す

この目標に対して直観主義的解決では、無謬性を示すことができないため一般見解を救うことはできないというのが前節での Wright の診断はであった。これを受けて、Wright は一般見解を救うために次のような提案を行う。

[提案 1] 局所的な範囲で、相対化された真理概念を採用する。真理の相対性は、(1) 命題の真理基準として整合性を採用し、かつ(2) 基礎的な諸命題の集合を複数考えること、で実現される。

つまり、次のように考えるわけである。ある命題が真であるかどうかは、その命題を整合的な諸命題の集まり(体系)の中に入れたときに、その命題がそうした整合的な体系を築

いている諸命題と整合的な関係を築けるかどうか依存する。つまり、その命題が整合的な関係を築ける（その命題を入れても依然としてその集合が整合的である）なら、その命題は真と見なされる。それゆえ、ある命題が真であるかどうかは、その命題を加えるものとしてどのような整合的な諸命題の集まりを持ってくるのかに相対的なものになる。

こうした枠組み（相対化された真理を、基礎的諸命題の集まりとそれとの整合性で描き出すという枠組み）を実現する一つのやり方として、Wright は次のような提案を行う。

〔提案2〕相対化された真理として「重主張可能性 *superassertibility*」を採用し、基礎的諸命題の集まりとしては、ある人が持っている情報（証拠）を考える。

つまり、最初の提案を次のように実現しようというわけである。はじめに「重主張可能性」について説明しておく、ある命題が私たちの通常アクセスできる情報・証拠の状態（つまり、普通に私たちが持っている情報・証拠の量ということである）において主張可能であるとしよう。さて、その状態にどれほど情報を追加したり改善を加えたりしても、ある命題の主張可能性が維持されるということがあるとする。このとき、その命題は重主張可能であると呼ばれ、またこのように、一度成立した主張可能性がそれ以後ずっと維持され続けるとき、その主張可能性は重主張可能性と呼ばれる。

すると、この重主張可能性と基礎的諸命題の集まりを使って、次のような場合を考えることができる。A と B がそれぞれ基礎的な諸命題の集合を持っていて、それらの諸命題が異なるとしよう。この場合、基礎的な諸命題とは A と B がそれまでの経験から得てきた情報・証拠の総体と考えられるだろう。さて、ある時点 t_1 である命題 P が A が持っている基礎的な諸命題の集合から A にとって主張可能なものになり、同じ時点で同じ命題の否定 $\neg P$ が B の持っている基礎的な諸命題の集合から B にとって主張可能なものになったとしよう。そのとき、その後にどれほど情報・証拠（新たな命題）が加えられても、A にとって P が、B にとって $\neg P$ が、後の時点 t_2 、 t_3 、...、 t_n においても引き続き主張可能なものでありうる。というのも、命題 P の主張可能性を維持しながら、新たな情報・証拠を基礎的な諸命題の集合に取り込んでいく仕方は複数ありうるからだ。このように、基礎的な諸命題の集合が異なると考えることで、A には P がある時点で主張可能になり、B には同じ時点で $\neg P$ が主張可能になり、かつそうした主張可能性をその後ずっと新たな情報・証拠の流入に際しても維持することが可能な状況を描くことができるのである。

このように考えることで、二人の対論者が真正に矛盾しつつ、無謬であることが言えるので、持続可能性も確保され、かつ単純演繹では仮定 4 がおかしいものと考えられるゆ

え、以前の結論 ($\neg (3)$) は出てこなくなる。

第一論文のまとめ

最後にまとめとして、Wright の重主張可能性と真理を同一視し、真理を相対化するという戦略の問題点を挙げておくことにしよう。一番の問題は、真正に矛盾している（二人が同じ一つの命題について対立している）ことを維持できるかどうかである。もしこれが維持できず、二人が異なる命題について争っていることになれば、二人の言明が無謬であるという主張も当たり前のことになってしまう。したがって、Wright は対論者たちが真正に矛盾していることを確保しなければならない。

しかし、これが Wright の枠組みではそう簡単ではない。というのも、Wright の枠組みでは命題というのは他の命題と整合的な関係にあり、整合的な体系の一要素としての役割を負っているからだ。このことから次のような困難が帰結する。ある命題 P に対して二人の人の理解が共通している（同じ命題内容を理解している）とは、要するに命題 P が他の諸命題（つまり情報・証拠のこと）と整合的につながる形（推論関係）が共通しているということだろう。このとき、まったく同じ推論関係を持つ整合的な体系を二人が持つのなら、おそらく基礎的な諸命題は非常に似ているであろうから、同じ命題内容を理解していると言えそうだが、逆に二人の意見の対立をうまく説明できないように思える。つまり、非常に似た基礎的諸命題を持ちながら P と $\neg P$ に対して、重主張可能性が本当に成り立ちうるのかが不明確になる。一方で、あまり類似した推論関係を持たないのなら、二人が同じ命題内容を理解しているという主張が疑いうるものとなり、それに伴い二人が真正に矛盾しているという主張も疑いうるものになってしまうのである。

2 JC Beall 「一般見解」のモデルを作ること」

この論文で Beall が目指すのは、Wright のように真理の整合説的な立場を取り、相対化される真理を重主張可能性と同一視するという路線を取るのではなく、真理の対応説の立場を取りながら真理概念に相対性を加えることで一般見解を擁護できる枠組みを提案することである。

2.1 味覚関数相対主義 taste-functional relativism

以下では Wright の真理相対主義に代わるものとして Beall が提案する相対主義的な実在論を提示するための主要な道具立ての一つである味覚関数を確認する。まずは次のような好みの論争を考えよう。

Bruce : Vegimate is delicious

Joey : Vegimate is not delicious

Beall によれば、この論争に対する自然な応答は、この論争が見せかけだとして、「is delicious」に関して相対主義を取るというものである。こうして、「is delicious」を変数とする「味覚関数」が導入される。この関数は (1) ある種の引数 (この場合はベジマイト) を取り、(2) 値として自然数を返す、というものである。例えば、あるもののおいしいかどうかは次のように判定される。

「 x is delicious _{t} 」は次のとき充足される。 $t(x)=n$ 、ただし $n \geq m$ (m はある閾値)

2.2 相対的な対応真理

Wright の診断では、命題的真理について相対的な態度を取ろうとすると、命題の真理が実在との対応で決定するのなら、そうした命題的真理に対して相対的な態度を取る試みは失敗するとされる。それゆえ、Wright は整合説的な立場を採用した。しかし、Beall によれば、命題の真理について相対的な態度を取りながら、対応説を取るという路線がありうる。そうした路線を描くのが、極性見解である。

2.2.1 極性見解

現在の課題は命題的真理に関して相対主義を取りながら、同時に真理の対応説を取ることである。その基本的なアイデアは、肯定的な事実が世界において成り立っていると考ええるのに加えて、否定的な事実もその世界において成り立っていると考えようというものである。例えば、 A が B のことを好きなとき、 A と B の間 ($\langle A, B \rangle$) には好きという関係が成り立っており、これを肯定的な事実が成り立っていると考える。そして、 B が A のことを好きではないとき、 B と A の間 ($\langle B, A \rangle$) には好きという関係が成り立っておらず、これを否定的な事実が成り立っていると考える。以下ではこのような考え方が極性という概念の導入によって定式化される過程を見てみよう。

[極性見解 polarity view] 極性見解は真理メーカーに関する見解であるが、その特徴は「肯定的極性」と「否定的極性」を考えることで、世界には「肯定的な真理メーカー」(肯定的な事実)に加えて「否定的な真理メーカー」(否定的な事実)が存在ことになるという点である。以下では基本的道具立てを確認しよう。

(1) まず肯定的事実と否定的事実が成り立っている世界がどのように構成されているのかを確認しておくと、Beall の提案するモデルでは、実在 W は、性質と関係の集合 R 、対象

の集合 D 、極性の集合 $P = \{1, 0\}$ から成り立っているとされる。つまり、 $W = \langle R, D, P \rangle$ である。

(2) 各性質 $r_n \in R$ は次数を持っていて、それはどれだけの数の対象のあいだで関係（性質）が成り立つのかを示している。例えば「 r_n 」なら次数は n であり、その意味は n 個の対象のあいだである関係（性質）成り立つということである。

このことから原始的事実は次のように表わされる。

$\langle r_n, d_1, \dots, d_n, i \rangle$ 、ただし $r_n \in R$ 、 $d_1, \dots, d_n \in D$ 、 $i \in P$ 。

これは次のように、 D の中に入っている対象 $d_1, \dots, d_n$ が関係 r_n にあり、極性が i であるような事実と読めばいい。例えば、ジョンはメアリーが好きだという原始的事実は $\langle like_2, John, Mary, i \rangle$ といった形で表現される。そしてこれに具体的な極性を入れると次のようになる。

まず極性 1 を入れた場合、 $\langle r_n, d_1, \dots, d_n, 1 \rangle$ となり、これは $d_1, \dots, d_n$ が r_n 的な関係にあるという事実ということである。また極性 0 を入れた場合、 $\langle r_n, d_1, \dots, d_n, 0 \rangle$ となり、これは $d_1, \dots, d_n$ が r_n な関係にないという事実、ということである。これをもとにして、肯定的事実と否定的事実が次のように定義される。

$\langle r_n, d_1, \dots, d_n, i \rangle$ は肯定的事実である iff $i=1$

$\langle r_n, d_1, \dots, d_n, i \rangle$ は否定的事実である iff $i=0$

例えば、ジョンはメアリーが好きだという肯定的事実は $\langle like_2, John, Mary, 1 \rangle$ 、メアリーはジョンが好きではないという否定的事実は $\langle like_2, Mary, John, 0 \rangle$ といった形で表現される。

またこれらの定義から文が実在的に真であるか実在的に偽であるかが決まる。 P_n は n 項述語、 $c_1, \dots, c_n$ は個体指示表現、 $\delta(P_n)$ は R の要素で、 $\delta(c_j) \in D$ とする。そうすると、

文 $P_n c_1, \dots, c_n$ は実在的に真である iff 実在が $\langle \delta(P_n), \delta(c_1), \dots, \delta(c_n), 1 \rangle$ という事実を構成する。

例えば、文「ジョンはメアリーが好きだ」が実在的に真であるのは、実在が $\langle \delta(like_2), \delta(John), \delta(Mary), 1 \rangle$ という事実を構成するときかつそのときである。そして、 $\langle \delta(like_2), \delta(John), \delta(Mary), 1 \rangle$ とは、 $\langle like_2, John, Mary, 1 \rangle$ のことなの

で、この文が真であるのは実在が $\langle like_2, John, Mary, 1 \rangle$ となっている（つまり、ジョンはメアリーが好きだという肯定的事実が成り立っている）ときかつそのときである。

文 $P_n c_1, \dots, c_n$ は実在的に偽である iff 実在が $\langle \delta(P_n), \delta(c_1), \dots, \delta(c_n), 0 \rangle$ という事実を構成する。

例えば、文「メアリーはジョンが好きだ」が実在的に偽であるのは、実在が $\langle \delta(like_2), \delta(Mary), \delta(John), 0 \rangle$ という事実を構成するときかつそのときである。そして、 $\langle \delta(like_2), \delta(Mary), \delta(John), 0 \rangle$ とは、 $\langle like_2, Mary, John, 0 \rangle$ のことなので、この文が真であるのは実在が $\langle like_2, Mary, John, 0 \rangle$ となっている（つまりメアリーはジョンが好きではないという否定的事実が実在の側で成り立っている）ときかつそのときである。

この原子文の真偽の条件に基づいて、再帰的に分子文も真偽も決められる。

さて、この立場では真理は真理メーカーとの一致に存するのだが、この場合の真理メーカーとは肯定的な事実と否定的な事実である。またこうした真理と事実（世界の状態）の見方から、過激実在論を次のように特徴づけることができる。すなわち、過激実在論とは、私たちとは独立に極性が定まっているという意味ですべての事実は絶対的に定まっていると考える立場である。

2.2.2 相対的に肯定的/否定的状態

Beall によれば、一般見解は、真理とは単純に一致であるということに同意するが、同時にそうした真理に関してちょっとした相対性を要求する。そして、その要求に答えるためには相対的に肯定的と相対的に否定的な世界の状態を考えることでうまくいくと考える。その基本的アイデアは、好みの主張（命題）を真（偽）にする状態はそれ自体が（例えば）味覚関数—ないし状態に、肯定的あるいは否定的極性を割り当てる何らかの関数—に相対的と考えるというものである。言い換えれば、一般見解は「状態」のサブクラスを認め、そのサブクラスは「好みの主張」に対応するものである、つまり、サブクラスとは味覚関数に相対的な極性のことである。

極性に相対性を加えるためには何をすべきか。Beall が提案するのは「極性マップ」という考え方である。これまでと同じように実在 W は、性質と関係の集合 R 、対象の集合 D 、極性の集合 $P = \{1, 0\}$ から成り立つ。違いは「極性マップ」をこれに加えることである。その極性マップとは $\langle t, p \rangle$ （ t は味覚関数で $p \in P$ から構成される）というものの。

そうすると、世界の状態は次のような構造を持つことになる。

$\langle r_n, d_1, \dots, d_n, i \rangle$ ただし、 $i \in P$ ないし $i = \tau$ (τ とは極性マップ $\langle t, p \rangle$ のこと)

ここで、 $i=1$ のときはその状態を完全に肯定的な事実、 $i=0$ のときはその状態を完全に否定的な事実と呼ぶことができる。 $i=\tau$ のときは、そのような状態は味覚関数とは独立には、肯定的な事実でも否定的な事実でもない。つまり、それらはなんらかの味覚関数に相対的にのみ（相対的な）事実である—極性を持つ—ような「中性的な状態」と考えることができる。例えば、 $\langle punching_2, John, Mary, 1 \rangle$ は、ジョンがメアリーにパンチを食らわしているという完全に肯定的な事実であり、この事実は私たちとは独立に決まっている。というのも、こうした事実は私たちの持つ何らかの関数（暴力関数）に通して（依存して）初めてその極性が定まるようなものではないからだ。また $\langle kicking_2, Mary, John, 0 \rangle$ は、メアリーはジョンにケリをお見舞いしていないという完全に否定的な事実である。これも、メアリーとジョンのあいだにメアリーがジョンにケリをお見舞いするという関係が成り立っていないことは私たちの関数（ケリ関数）に依存するような種類の事実ではないことによる。これとは対照的に、ベジマイトがおいしいかどうかは私たちの味覚関数を通して（依存して）その極性（その事実が肯定的か否定的か）が決まる種類の事実となる。つまり、ベジマイトがおいしいという事実は $\langle delicious_1, Vegimite, \tau \rangle$ という中性的な世界の状態として表現され、この事実自体は肯定的な事実でも否定的な事実でもない。こうした中性的な状態にある特定の味覚関数が働いて（つまりある人がベジマイトを食べて）初めて、その事実は肯定的なものか否定的なものかのどちらかに決まるのである。

ここで、これまでの議論をもとに、過激实在論と一般見解の違いを確認しておこう。それは、前者は「事実」に一切の極性マップを認めず、後者は部分的に認めるところであろう。つまり、過激实在論はすべての事実は絶対的に肯定的か絶対に否定的であると考えのに対し、一般見解は、ある事実に対しては味覚関数が示されない限り、ある事実が肯定的か否定的かが決まらなと考えるのである。

2.3 一般見解

こうした極性見解を基にした相対的対応の真理が一般見解をうまく説明することができるかを確認しよう。

矛盾：論者は同じ命題に対して両立不可能な信念を持っている。

無謬性：味覚関数に相対的であることが言える。

持続可能性：味覚関数は取り変えできないので、持続可能性に対する攻撃もほとんどない。

このことから Beall は「相対的な対応」モデルは有望であると結論する。このモデルにおいて「問題に関する事実が存在しない」という考えは十分な意味を持つ。つまり、一般見解者は次のことを受け入れている。ベジマイトがおいしいかおいしくないかに関して（味覚関数に相対的な）問題の事実は存在する。一般見解がいうのは、絶対的に肯定的な（否定的）な問題に関する事実が存在しない、ということだけなのである。

第二論文に対する批判

最後に第一論文の批判である第二論文に対して批判点を述べることにしよう。そこで、Molnar(2000) に対して応答する論文 Beall(2000) で取り上げられている否定的真理に関する真理メーカーの問題を取り上げよう。否定的真理に対する真理メーカー理論について論じる上で、Molnar(2000) において挙げられている四つの前提をまず確認しよう（ただし Beall(2000) では (1)、(3)、(4) のみが挙げられている）。

- (1) 世界は存在するものすべてである The world is everything that exists
- (2) 存在するものすべては肯定的である Everything that exists is positive
- (3) 世界についての否定的主張のいくつかは真である
- (4) 世界についてのすべての真なる主張を真にするのは存在するものである

これに対して、Beall(2000) では、Molnar の前提を満たしつつ、考慮していない選択肢として極性見解を提示するのだが、この提案の一つの問題は次のようなものである (Beall, 2000, p. 266)。この提案が可能なものであるためには極性が異なるものである必要がある。それゆえ、 $\langle \delta(P_n), \delta(c_1), \dots, \delta(c_n), 1 \rangle$ と $\langle \delta(P_n), \delta(c_1), \dots, \delta(c_n), 0 \rangle$ を区別したのであるが、そのためには極性が異なるという否定的事実が必要である。しかし、極性見解ではこの否定的事実も $\langle r_n, d_1, \dots, d_n, 0 \rangle$ という形を持つものである。したがって、問題となっているまさに極性が（一番右に）現れてしまい循環が起きてしまうのである。

これに対する Beall の解答は、(1)、(3)、(4) を保持しようとする真理メーカー理論はすべてこうした循環を抱えており、その意味でこうした循環の指摘は自分の極性見解のみにマイナスに働くわけではない、というものである。つまり、もしすべての真理が真理メーカーを持つのなら、当然真理メーカーについての真理も真理メーカーを持つことになってしまうので、そうした真理に対して非循環的説明を与えられるような真理メーカー理論はないのである。

Beall が言うように、確かにこうした循環は基礎的な性質や事実を措定するあらゆる理論に避けられない事態であろう。ある地点で、基礎的な事実の説明は、説明的なものではなく、たんに「まさに実際にそうであるところの that is just the way things are」を繰り返すものとなる。したがって、こうした枠組みにおいて、こうした循環は極性見解だけでなく他のすべての理論も直面している問題であり、この論点では理論間に優劣はつかない。しかし、この枠組みを採用する理論すべてが共通にこうした問題を抱えている事実は、そもそもこうした枠組み自体が問題であることを示すものでもあるだろう。したがって、すべての理論が同じ循環に陥るということで、この循環の問題を片付けるのではなく、そうした枠組み（あることを説明するのに何か基礎的なものに還元するやり方）ではなく、別のそうした枠組みを採用しない路線も追求されなければならないだろう。

おわりに

本書評で取り上げたのは真理に関する Wright と Beall の二つの論文であった。Wright の論文からは次のようなアイデアを学ぶことができる。味覚に関して一般見解的な態度を擁護しようとする者、ないしすべての命題は真か偽のどちらかだとする過激实在論が間違っていると考える者にとって、まず真理概念自体に変更を加え、新しい真理概念としてどのようなものを提示することができるのかについていい見本を得ることができる。また（１）整合説と、（２）複数の基礎的諸命題、という二つを組み合わせることで（真理の）相対性を生じさせるというやり方の基本的構造は、ある議論において相対性を持ち込みたいときに応用できるものだろう。次に Beall の論文からは次のようなアイデアを学ぶことができる。まず私たちは、实在論かつ真理の対応説的な立場に立つとき、实在（肯定的事実と否定的事実）と文がどのように対応しているのかを説明する一つのやり方を学ぶことができる。その上でさらに、ある領域（言明クラス）に対して真理を相対化する仕方（極性見解）を知ることができる。この場合、否定的事実（否定的な真理メーカー）が存在するのかという形而上学的な問題もついて回ることになるが、対応説を取りつつ真理を相対化する試みの見本として参考になるだろう。

文献

Molnar, G.(2000). 'Truthmakers for Negative Truths', *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 78, No. 1, pp. 72-86

Beall, JC.(2000). 'On Truthmakers for Negative Truths', *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 78, No.2, pp. 264-8

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕